

とうなすやせいだん
唐茄子屋政談 上 本文



江戸時代には、スーパーマーケットやショッピングセンターというものがありませんでした。ですから、日々の生活での食べ物や日用品などは、それぞれのお店や行商人から買っていました。

(ー)、とうふ屋ならば「とうふ屋」、とうがらしなら「とうがらし屋」から買わねばならず、今のようにスーパーやコンビニで一気に買いそろえるというわけにはいかなかったのです。

そういう世の中なので、売る方は売る方で、いろいろと品物をそろえてなくてもよいのです。とうふ屋ならば、とうふだけ売っていても十分に生活することができていました。そんな時代のお話です。

一 吾妻橋

ある夏の日のことでした。夕立の雨が上がり、日も (2) と暮れた吾妻橋の上あじまはしから、じつと川を見つめている一人の若者がいました。

若者といっても、頭はぼさぼさ、ひげも伸びほうだいに伸びています。色あせた着物は、この夕方の雨をあびてくたくたになっており、なんとも情けない身なりをしています。

この若者の名前を徳兵衛と言い、このあたりでは名の知れた大店の若旦那でした。

(3) この若旦那、家がお金持ちなのをいいことに、働くことを一切やらず、あちこちで遊びまわっていました。

大店の跡取り息子が、仕事もせずに、親の金で遊んでばかりいるというのは世間体もよくありません。とうとうある日のこと親父さんに呼ばれて説教をくらってしまいます。親父さんの方は、徳兵衛にいろいろ言っけて聞かせるのですが、当の本人は①のれんに腕押しといった感じでちっとも親父さんの話を真面目に聞くようすがありません。とうとう堪忍袋の緒が切れた親父さんに、

「お前のようなやつは勘当だ。」

としかりつけられた徳兵衛は、売り言葉に買い言葉で、

「ああ、ああ、分かりました。勘当ですね。私は何も困りませんよ。お天道様と釜の飯はついて回る世の中です。今までどうもお世話になりました。」

と生意気なことを言って、家を飛び出してしまいました。



現在の吾妻橋

二 吾妻橋の続き

『勘当』^{かんどう}というのは、親の方から家への出入りを禁止することです。つまり、親子の縁を切るというのですが、こういう時代に勘当をされてしまうと、自分の家ばかりでなく、^ア親戚の家への出入りもやりにくくなってしまつてしまうものです。

この徳兵衛という男、これまで^イ真面目に働いたことがありませんので、家を飛び出したはいいけれども、

「さあ、自分で働いて^ウ稼いで何か食べよう」

というところに考えは至りません。

はじめは、知り合いや友達をたずねてあっちへふらふら、こっちへふらふらしていました。しかし、いくら知り合いや友達だからと言って、いつまでも置いてくれる所はありません。まして、徳兵衛は一文無^{いちもんな}しです。

おおだな あとこ わかだんな わかだんな あつか
大店の跡取りでいたうちは、だれもかれもが「若旦那、若旦那」と下へも置かぬ扱
いをしてくれていましたが、働きもしない一文無しの男がいつまでも赤の他人に世話
になれるほど、^エ世間は甘くありません。家を出てからひと月もしないうちに、徳兵衛
は誰からも相手にされなくなっていました。

しかし、生きていくからには、何か食べなきゃいけません。身をよせるところがな
くなってからは、ただもう、「何か食べるものはないか」「どうにかならないもんか」
と、^フぶらぶら歩いているだけです。

明るいうちはあちこち歩いて、夜になると、お宮の縁^{えん}の下などに入って夜を明かし

ます。明るくなるとまた表へ出てふらふら歩いている。そんな日々を送っていると気持ちの方も落ち込み、すさんでまいります。食べるものにもまことにありつくことはできず、生きる気力もだんだんなくなってまいります。

この日の徳兵衛は、とにかく腹がへっていました。ここ三日ばかりろくに食べておりません。日暮れ前には、ぎーっと夕立がきます。他の人たちはオ雨宿りに走りますが、若旦那はざあざ降りの中、

「もういいや、雨にぬれたって。この方が、汚れが落ちてちようどいいや。」
と平気で雨に打たれて歩き続けます。

ちようど、あつまばし吾妻橋へかかったころには、雨があがりまして、そうして橋の下の川の流れをぼーっとながめていました。

「ああ、なんでこんなことになっちまったかなあ。」

徳兵衛は、あの日の親父さんの説教を、もっと真面目に聞いていたらとカ後悔しきりです。家を出るあの日まで、何不自由ない生活ができていたのは、何と云っても親のおかげです。自分一人では、何もできない。それは心の底では分かっていました。なのに、説教された腹いせと勢いで、後先を考えず家出をしてしまった。

「①もう、生きてたってしょうがないや。この川に身投げでもして、楽になろう。」
そう思って、橋のらんかんに足をかけ、さあ飛び込もうとしたその時です。

「ああとー！」

誰かが徳兵衛の足を引っばります。

三 吾妻橋の続きの続き

川に飛び込もうとした足を、誰かに引っぱられた徳兵衛は、そのまま橋の真ん中に尻もちをつきますが、

「止めないでください！死ななきゃならないわけがあるんです！」

また川に飛び込もうとします。男は徳兵衛の着物を引っぱって、

「そりゃわけがあるんだろがよ。ちよっとお待ち、お待ちってんだよ。①乱暴なこと
しちやいけねえよ。」

とりあえず、徳兵衛を地べたに座らせます。

「そりゃ死ななきゃならんねえわけがあるのは分かるよ。誰だっておもしろがってこんなところへ飛び込むやつはいねえ。だけどさ、ちよっとお待ちてんだよ。」

男は大きくため息をついて徳兵衛に言ってきたせす。

「まあ、しょうがねえ。若い人はなんでもそうだ。すぐに『自分が死ねばことがすむ』
と思うんだよ。でもね、冗談言っちゃいけません。後に残された者は困るんだ。も
っとよくお考えなさい。また、道は開けるんだからな……んん……おや？」

と言いながら男が、徳兵衛の顔をじっと見ます。

「お、おまえ。徳兵衛じゃねえか。」

驚く男の顔を見て、徳兵衛も声をあげます。

「え？ああ！おじさん！」

おじさんと呼ばれた男は、

「おめえか……」

と言った後に小さく「ちっ」と舌打ちをして、

「おめえなら止めるんじゃないな。飛び込んじゃえ。」

とそっぽを向いてしまいました。

徳兵衛は、あわてておじさんに手をつきます。

「助けてください。」

「なんだよ。お前。今、『死ななきゃならねえわけがある』とそう言ってたよな。わけがあるんだったらおじさん止めねえよ。②ここで見ててやるから。はやく、飛び込
んじゃえ。飛び込みな。」

大川の方を指さしながらぶっきらぼうに言います。

しかし、徳兵衛はさすがのようにおじさんに頭を下げます。

「おじさん。助けてくださいよ……お願いします。」

「ふん。なんでえ、そのさまは。そういや、③うちを出るときにおめえ、たいそう大
きなことを言っ出てったなあ。『お天道様と釜の飯はついてまわる』とぬかしやが
った。どうだ、ついてまわってんのかい。」

「お天道様はついてまわってますが、釜の飯がなかついてまわらないんです。
「あたりめえだ！」

ぴしゃりと言ってから、おじさんは徳兵衛の前にしゃがみ込み、両方の目をじっと
見てゆっくりと言いました。

「なあ、どうだ。目が覚めたのかい。」

「へえ、すっかり、目が覚めました。おじさん、おねがいです。助けてください。」

徳兵衛は、頭を何度も下げながら、必死です。

おじさんは、腕組みをして「ううむ」とうなりました。

「お前の面倒を見ると、お前のおやじにこっちは（ー）言われなくちゃならねえ。しかしなあ、おれも止めちゃったんだからな。このまま、知らないふりをするわけにもいかねえし。」

徳兵衛のことは、小さい頃からよく知っています。心は優しいのですが、気が弱い上に、面倒なことからは逃げてばかりいるような子供でした。

（そんな徳兵衛が、川に身を投げて死のうというところまで一度は覚悟をしている。

「目が覚めた」と言うのに嘘はなさそうだ。）

そう思ったおじさんは、徳兵衛に言いました。

「じゃあしようがねえから、おじさん、④うちへ連れてってやる。そのかわり、いいか、何でもするんだぞ。」

「へえ、もう、何でもいたします。できることは何でもいたします。できないことはいけません。鼻からそばをすするとか……。」

「そんなことを言うかい。もういいから、ついてこい。」

四 唐茄子行商

次の日の朝、おじさんが徳兵衛をたたき起こします。

「おい、いつまで寝てやがる。おじさんは、ひと仕事してきたぞ。起きろ！」

起きてきた徳兵衛に、さっそくものを言いつけます。

「さあ、①そこにあるものを身に着けるんだ。」

見ると、町で見かける行商人たちが身に着けているような、前掛けやはき物などが並んでいます。

行商人の例（魚屋）



家の前には、「てんびん棒」があり、棒の両はじに、唐茄子を山のように積んだおけがぶら下がっています。

唐茄子とは『かぼちゃ』のことです。

暑い夏の日が照り付ける中、重たい唐茄子を肩にかついで売り歩くのは、さぞかし重労働にちがいありません。

「お前、『なんでもする』ってそう言ったな。」

おじさんが、確かめるように徳兵衛に言いました。

「へい、何でもさせていただけます。はい、何をいたしましょう。」

「今日から、唐茄子売るんだ。あそこに荷があるだろ、あいつをかついで売って歩く

んだ。」

「ああ、あれですか……」

やはり自分が行商をさせられると知った徳兵衛は、ぼそぼそと小さな声で、

「ああ、あれ、あの、おじさん……②かんべんしてくださいな。」

うつむきながら言います。

「何をかんべんするんだ？」

「いやあの……あれをかついで、唐茄子を売っているところを、もし、知ってる人に見られたら……みっともないじゃありませんか。」

それを聞いたおじさんは、目を鬼のようにかつと見開きました。

「みっともねえ？ああ、そうか。いや、よしな。いいんだ。なにも無理にお前に売ってもらおうというのじゃないんだ。いやだったらよした方がいいよ。そしたら、さっさとそれを脱いでな、お前の着てきたその汚い着物を着て、はやく川の中へ飛び込め！」

③徳兵衛は、はっとなり、あわてておじさんに謝ります。

行商と言っても、真面目にやれば大人がちゃんと食べていける立派な商売です。その商売を思わず「みっともない」と言ってしまったのは、若い頃からずっと商売で身を立ってきたおじさんが怒るのも無理はありません。

「すいませんー分かりましたー売ります。」

「いい、売らなくなっちゃっていいーさっさと出ていけこんちくしょう。今すぐ出て行って、

川の魚のエサにでもなりやがれ！」

おじさんは顔を真っ赤にしてびしびしと徳兵衛をしかりつけます。

徳兵衛は何度も何度も一生懸命に謝って、なんとか許してもらい、おじさんの言う通り、唐茄子を売りに出かけることにしました。

「すいませんおじさん。唐茄子を売ってきます。」

そうやって、唐茄子をてんこ盛りに盛った天びんをかつごうとする徳兵衛をおじさんが呼び止めます。

「おう、待ちな。これを忘れちゃいけねえ。昼になったら、どっか唐茄子が売れた先で弁当をつかわせてもらうんだ。茶屋になんぞ入るんじゃねえぞ。」

と言って弁当を持たせてくれました。

徳兵衛は、生まれて初めての行商のため、町へ出て行きました。

五 田原町

たわらまち

真夏の日ざしがようしゃなく照りつけます。

ひよろひよろとした体で重い天びんをかついでいる徳兵衛は、ひたいをつたう汗をふくこともできません。もう歩くので精一杯です。暑さで頭もぼーっとしてきます。

両手で天びんにつかまって、よろよろと吾妻橋を渡り、たわらまち田原町にさしかかったとき、

徳兵衛はついに、石につまずいて転んでしまいました。

「いたたたたつ。」

ひっくり返った唐茄子があちこち転がっていきます。そして徳兵衛もひじをすりむいてしまいました。

するとそこへ一人の男がやってきて、

「おい、大丈夫か。ああ、ああ、唐茄子がばらばらだよ。」

転がった唐茄子をひろい集めてくれました。

「お前さん、この暑い中こんなにたくさん唐茄子をかついできたのかい？」

男は山盛りの唐茄子を見て感心しています。

徳兵衛は、「たくさん唐茄子をかついできたのか」と聞かれただけなのに、自分がこうなった「わけ」を話し始めました。

もともと自分は大きなお店の跡取りだったのが、遊びがすぎて父親に勘当され、川に身を投げて死のうと思っていたこと。そんな自分をおじさんが助けてくれて、今日

このように唐茄子を売り歩いていること。

それを聞いた男は、

「そうかいそうかい。まあ、立派なもんだ。まだまだ若いんだから、そうやって心を入れかえて一生懸命にやっていたら、いつかまた勘当が許されるかもしれないな。

今日のところは、おれが売りさばいてやるから、まかせておきな。いや、いいんだ。

この辺りの連中は、みんな知った顔だからよ。」

と言ったかと思うと、通りがかりの人にどんどん声をかけて唐茄子を売りさばいていきます。

「よお、熊さん。唐茄子買ってくれよ。」

「ええ、唐茄子？おまえさん八百屋でも始めたのかい？」

「ちがうんだ、まあ、聞いてくれ。こちらの若い人がね、しくじって親に勘当されち

やっつてね。それでもってね……」

といちいち徳兵衛が唐茄子を売っているわけを話してまわります。

そうこうしているうちに、どんどん唐茄子はなくなって、とうとう残り二つになってしまいました。

何度も礼を言う徳兵衛に男が言います。

「へへ、おれの手にかかればこんなもんさ。また困ったらいつでも声かけとくれ。」

「では、また明日おねがいします。」

「毎日はだめだよ。でも、お若いの、しっかり商売にはげむんだよ。」

六 売り声

すっかり軽くなった天びんをかついで、徳兵衛は歩き出しました。

それにしても、①これだけ歩き回っているのに、なぜ徳兵衛の唐茄子は一つも売れなかったのでしょうか。

なぜ売れないのか考えながら歩いているうちに、徳兵衛は「あっ」と気がつきました。さっきまでは、重い荷物をかつぐのでせいっぱいでしたが、荷が軽くなってまわりを見るようが出てきたのです。売れない理由は、売り声でした。

道行く行商人を見ていると、自分以外の行商人は、みんな売り声を出しています。

ところてんを売っている人ならば、「てくん、てくん、ところてくん」のように売り声を出すのです。

荷をかついで歩いていても、黙って歩いていたら、売るために歩いているのか、ただ運んでいるだけなのか、他の人には分かりません。

ならば、と徳兵衛も売り声を出そうとしますが、なにしろ徳兵衛は「何かを売り歩く」という経験がありません。いざ声を出そうとしますが、人に聞かれると恥ずかしいという思いもあるのか、なかなか声が出せません。

「とととつ……とうなすう……」

蚊の鳴くような声で言ってみました。こんな声ではだれにも聞こえません。もっと大きな声を出そうとしますが、

「なんだい人が来たよ、せっかく声を出そうと思っていたのに。」

とわけのわからないことを言います。

徳兵衛は、だんだん人気のない方へと歩いていき、気づけば一面に田んぼの広がる田舎道に出ていました。ここなら誰にも聞かれることはありません。

安心した徳兵衛は、

「とーなーすー。とうなすやでーござい。」

と高らかに声をあげます。

なあ、どうせ聞かれても田んぼのカエルぐらいだ。カエルに聞かれたって付き合ひがあるわけじゃねえ。

「とーなーすー。とうなすやでーござい。」

それにしても、さっきの人は親切だったなあ。渡る世間に鬼はないっていうが、本当だよ。昨日までのおれは、一文無しの上に、人にも見放されて、一人ぼっちで、食うものもなく。もう、こんな世の中生きていてもしょうがないと思ってたなあ。でも、こうして天びんかついて真面目にやれば、助けてくれる人もいるんだなあ。

「とーなーすー。とうなすやでーござい。」

でも、おれはまだ唐茄子を自分の力で一つも売っちゃいない。せめて残り二つは、自分の力で売りたいもんだ。しっかり金を稼ぐ商人にならなきゃいけない。

「とーなーすー。とうなすやでーござい。」

七 誓願寺店

せいがんじだな

そこからどこをどうまわったんでしょうか。ふっと気が付いたときには、せいがんじだな誓願寺店の近くへやって来ていました。

誓願寺店といいますと、今の東本願寺の裏手の方に誓願寺というお寺があり、その裏にまたずーっと長屋がありました。寺の裏手、お墓の近くということもあり、たいへんな貧乏長屋だったのですが、徳兵衛はそこを流してきます。もうだいぶ売り声も板についてきた徳兵衛が、そのまま長屋のそばを通りますと

①「あの、唐茄子やさん。」

「へい」

見たところ、年ごろ二十七八ぐらいのおかみさんが立っています。

いつからくしを入れていないのか、それも分からないぐらいに、髪がみだれ放題にみだれています。そして、着物もよれよれで縞目しまめも模様も分かりません。

たいへんに粗末な見た目でございますが、どことなく品のあるおかみさんです。

「恐れ入りますが、こちらへ入ってきていただきありがとうございます。」

「ああ、よろしゅうございますよ。へい。」

と、徳兵衛はあとをついて、長屋の奥へ入って行きます。するとおかみさんが、どうせん銅銭四枚をすっと前に出して、

「あの、ここに、お鳥目ちやうもくが四文しもんございます。これでお唐茄子が買えますでございますま

しょうか。」

『お鳥目』というのは、穴のあいたお金のことです。丸いお金の真ん中に、穴が空いている様子が鳥の目のように見えるため、お金のことを『お鳥目』と言うことがあります。

「ええ、一つ四文でございます。ありがとうございます。」

とおかみさんに答えた徳兵衛でしたが、二つあるうちの唐茄子が一つ売れたら、残り
は一つ。そこで、徳兵衛はおまけをするつもりで

②「ええ、あの、二つおいてまいります。」

と唐茄子を二つ重ねておきました。

「いええ、もうお鳥目がございません。」

というおかみさんをさえぎるように、

「いえいえ、いいんです、いいんです。」

と手をふります。

「これを、売ってしまえばあたしはもう、荷が空になるんでございます。それなら、
すつと帰れますから。もう、残り物でございます。ええ、おまけいたします。」

「ありがとうございます。」

おかみさんは、ていねいにお礼を言います。